

『仮名文章娘節用』を読む

— 女人往生の物語として —

檜 山 純 一

—

未来成仏疑ひなき恋の手本となりけり

言うまでもない近松の浄瑠璃『曾根崎心中』（元禄十六年五月大坂竹本座初演）の一節である。後に幕府は心中を厳しく禁じ、心中した二人の死骸は取捨て、あるいは晒された（享保八年二月の触他）。それほどまでに心中流行を招いたお初徳兵衛の死は、まさしく「恋の手本」となったわけである。

天保二（一八三一）年から五年にかけて刊行された曲山人の人情本『仮名文章娘節用』も、その書名の「娘節用」が示すように女性の手本とすべき読み物と謳われている。女主人公小三の書き置きを読んだお雪に対して母親が「この書き置きはおまへの為には、実によい手本だよ」とも言っている。ならば、同じ手本とまで言われる小三は、お初徳兵衛のように成仏疑いなく

往生できたのか。愛する男のため、その妻お雪に義理立てし自ら命を断った小三は成仏できたのか。幼い我が子という未練をこの世に残したまま、自ら命を断った小三は迷うことなく成仏できたのか。

本稿の狙いは、この『仮名文章娘節用』を女主人公小三の往生の物語として読もうというものである。

二

『仮名文章娘節用』（以下「娘節用」）には、前編後編「曲山人補綴」三編「三文舎自楽補述」とあることから、以前から曲山人（三文舎自楽）の自作というよりも、彼が粉本に手を入れて補綴完成した作品と考えられてきた（注1）。そして近年鈴木圭一氏の報告により、天理図書館所蔵の写本『人情夜の鶴』（以下「夜の鶴」）が、粉本である可能性が示された（注2）。確か

に、男主人公国三郎の両親が駆け落ちして京へ上ること、京で妻を亡くし生活に苦しんでいた男から妹娘小るりを養女として迎えること、国三郎が江戸へ養子として迎ええられること、吉原で小るりの姉と会うこと、芸者雛吉となった小るりと再会すること、雛吉が国三郎の子金次郎を生むこと、雛吉の姉は向島で尼となり紫雲と名乗ること、雛吉は国三郎の祖父、隠居白石に国三郎と別れるよう頼まれ自害することなど、鈴木氏の言われているように筋の展開は『娘節用』と同一であるし、人物名も類似している。なかには、お雪・紫雲などまったく同じ名も見られる。さらに、

うば「そりや又しれた事あなたはお家のおじやうさん若旦那様はお血筋で御養子で御ざい升物をおこゝろづかひも遊すはずで御ざひ升とおかやきもちではら立顔

お雪「そんな事をゆふとしかられる上方のおちいさんの本とおのお内は爰だとおとつさんよりお兄さんがたいせつだと常々おつかあさんがおつしやるよと国三郎の取なしをする心成るべし

〔夜の鶴〕

うば「それは又しれた事。あなたはお家のお娘さま、若旦那さまはお血すぢでも、御養子でござりますもの、お心づかひもあそばす筈をと、お主おもひの岡焼もち。

お雪はにこにこわらひながら「ヲヤ／＼そんな事をいふとしかられるよ。上がった伯父さんの、まことのお宿は爰だか

ら、おとつさんよりお兄さんが大切だとつね／＼から、おつかさんがおつしやつたよと、子供心にも金五郎を、大事にするぞいぢらし、。

〔娘節用〕

など登場人物の詞章もかなりの類似が見られる。鈴木氏の指摘通り『夜の鶴』が『娘節用』の粉本である可能性はかなり高いと言えよう。そうなると当然『娘節用』の読みを考える上で『夜の鶴』の存在は無視できなくなる。

もちろん、これほど筋の展開や詞章が類似していると、『夜の鶴』の方が『娘節用』をもとに書かれたのではないかという疑問も起ころう。念のため『夜の鶴』の成立時期を考えておこう。まず、『夜の鶴』には十返舎一九の署名と印がある。これを素直に信じるならば一九は天保二年に没しているので、それ以前に書かれたということになる。一九の創作であるか、写本として流布していたものを一九が写したものはわからないが、写本『江戸紫』を下敷きにして『清談峰初花』（文政二・四年刊）を著した一九であるから（注3）、多少一九の手が入っているかもしれないが、『夜の鶴』はもともと写本として流布していたもので、それを一九が写したものである可能性は十分にあるう。

また、『夜の鶴』内部の成立時期を反映していると考えられる記述として、回向院で行われている善光寺の開帳への女主人公雛吉の参詣が挙げられる。回向院で善光寺の開帳が行な

われたのは、『武江年表』によれば、文政三年六月のことである。よって『夜の鶴』が書かれたのはそれ以後ということになるが、それほど時は経たないうちであろう。もし、『夜の鶴』成立が『娘節用』刊行後の天保五年以後『娘節用』をもとに書かれたものであれば、この年天保五年が弘法大師千年忌ということで、蓮華寺はもとより回向院でも弘法大師の開帳が行なわれており、かなり話題になっていたであろうから、わざわざ『娘節用』の蓮華寺参詣を削除し、より古い善光寺の出開帳の記事を入れるというのは考えにくい。

もちろん『夜の鶴』が天保五年以後の成立となれば、一九の没後であるから何者かが一九の名をかたつたと考えねばならぬ。

また、『娘節用』には「東からのぼつて来てゐる、路考の門弟の路之助が」瀬川路之助は文政十年から天保二年まで上方で出演。天保二年には江戸河原崎座の顔見世に出演）や「源之助か。今は東都へ帰つての、ますく評ばんがよくつて、去年の春向町の芝居で、菰葦の狂言をしたが、」沢村源之助は天保元年三月江戸河原崎座で菰葦道心を演じる」と、刊行前年天保元年の芸能界の話題が書かれているが、これは曲山人が粉本をもとに『娘節用』を成す際、より最近の話題として書き直したのであるが、『夜の鶴』にも同じように役者の名は見られる。

『夜の鶴』には、まず「今度江戸から岩井半四郎とゆふお山が参りました」とあるが、五代目半四郎が上方へ行ったのは、

『歌舞伎年表』等によれば、文政四、五年のことである。六代目は文政十二年、糸三郎時代に京へ、七代目は天保二年紫若時代に大坂へ行っているが、いずれも半四郎を襲名してからは、上方へは行っていない。ここは五代目の文政四、五年の上方行きて読むべきであろう。

また『夜の鶴』には、「いつぞや江戸の梅幸が当地へ来て白井権八をした時よひ男じやとほめくさつたが」とあるが、梅幸こと尾上菊五郎は、初代が京生まれ、二代目は早世、三代目が江戸小伝馬町生まれ、四代目が大坂生まれであるから、ここは三代目菊五郎を指すのであろう。ただし彼が上方で白井権八を演じたという記録は、文政八年十一月大坂角の芝居での『梅浪華早咲源氏』が最初で、その後天保十二年、嘉永元年といずれも大坂角の芝居で権八を演じている。

『夜の鶴』では、「いつぞや江戸の梅幸が当地へ来て」とあり、菊五郎が上方で権八を演じたのが、半四郎の上方行きよりも前の出来事ということになっている。しかし五代目半四郎は文政五年以後上方へは行っていない。『夜の鶴』に書かれている菊五郎と半四郎の上方行きは現実の時間とは逆ということになる。では、『夜の鶴』で言われている半四郎は五代目ではないのか。

そこで、文政十二年の六代目の糸三郎時代の上方行きを指すと考えたと、『夜の鶴』が書かれたのは、六代目が半四郎を襲名した後、すなわち天保三年十一月以後ということになるが、この場合も一九没後なので考えにくい。

もつとも、文政四、五年の五代日半四郎の上方行きより前に、三代目菊五郎が上方で権八を演じたという記録はないものの、文化十二年十一月の三代目襲名後だけでも、文化十四、十五年の都座、文政三年の大坂角の芝居など何度か上方へ行っているし、江戸では栄三郎時代であるが、文化三年九月に市村座の『花兄幡随長兵衛』で白井権八を、菊五郎襲名後文政五年正月には河原崎座の『松梅鴛曾我』で平井権八を演じている。

あるいは『夜の鶴』の記述は、三代目菊五郎が上方で権八を演じたという事実にもとづくわけではなく、江戸で演じられた菊五郎の権八の印象と上方行きが合わさって、「江戸の梅幸が当地へ来て白井権八をした」と書かれているだけなのかもしれない。もつとも『夜の鶴』で役者の話題が出るのは小るりの上方時代で、回向院参詣は難吉の自害少し前のことであるから、実際の文政四、五年の半四郎の上方行きと文政三年の善光寺出開帳とは前後してしまう。

もとの写本は善光寺の出開帳のあった文政三年後間もないころに書かれ、その後それが書き写される段階で半四郎・菊五郎のことが書き加えられたため、あるいは別の役者の名であったものが書き換えられたためと見るべきかもしれない。

『夜の鶴』は、その物語内の出来事と実際の出来事の時間的順序は異なるものの、文政三年から八年頃の出来事が盛り込まれていることから、その頃成立したものとみてよいであろう。つまり『娘節用』よりも先に成立していたと考えてよいようにで

ある。

『娘節用』が『夜の鶴』を下敷きに書かれたのか、あるいは両者ともにさらに別の写本をもとに書かれたのか、それはわからないが、少なくとも『夜の鶴』は『娘節用』をもとに書かれたわけではなさそうである。両者ともに別の写本をもとに書かれたとしても、筋の展開や詞章の類似から、その写本は『夜の鶴』や『娘節用』とかなり近いものであったろう。そう考えると、『夜の鶴』と『娘節用』に共通してみられる、往生の物語として説める要素を検討することで、『娘節用』が下敷きとした写本の段階で、どの程度往生の物語として説めたのがわかる。『娘節用』の説みを考えるうえでそれは確認しておく必要がある。

三

最初に注目すべきは、おかめの身投げである。おかめは、「なきしづみたる闇の戸を、ふけゆく夜半の風ならで、ほとほとうちたゝき、おかめ／＼とよぶこゑに」誘われて「裏口よりぬけ出て、いづくとも無いそぎ行ぬ」と神隠しに会い、後の小三（おかめ）の言葉によれば「われをわすれてぶら／＼と、家をぬけ出はしりましたが、その後の事はさっぱりしらず、どうして身を投しやら、加茂河へながれ着いたを、近所のものに引上げられ、」というように鴨川に身を投げるが助かるのである。家の者も金五郎も、おかめは「神かくしにでもなつたのか、又

は身をなげて死んだかと心を尽して尋ねさせ」るが、「生死の程もわからぬから、家出した日を忌日として、仏事供養も懇にする」と死んだものとして扱うのである。「娘節用」では声に誘われて、おかめは一人で出ていくが、「夜の鶴」では「ある夜枕元の雨戸を小るり小るりと呼ばれ、明けると国三郎と見しまゝ、の若しゆにて、小るりが手を取こよひ忍んで迎ひに來たと云ける」と国三郎の幻影に連れていかれるのである。

神隠しとは、「神あるいは妖怪に人間がさらわれること、換言するならこの世からあの世（異界・他界）へと人間が迷い込んだり、連れ出されたりすること」（注4）であるし、川は「此岸と彼岸を隔てるものであり、だから境界としての意味をもつ」（注5）のである。特に鴨川の先には東山の寺院や鳥辺野といった墓所があり、まさしくそこは異界であった。大山喬平氏は、かつて鴨川は葬送の地であつたと指摘する（注6）。神隠しに会つたことと鴨川への身投げは死を意味する。つまりおかめは一旦死んだのである。

『夜の鶴』では、小るりの家出の場面のすぐ後に鴨川で溺れていたところを助けられる場面が語られるが、『娘節用』ではおかめの生死は、再会後の小三の言葉まで読者にはわからない。その分「娘節用」のほうが『夜の鶴』に比べ、より一層おかめの死の印象が強いと言える。

ではなぜ、おかめは一旦死ぬのか。五来重氏は迎講について、「生きているあいだに一旦死んだことにして葬式供養をおこな

い、それから再生すれば、一切の罪穢は消滅して、健康で長生するばかりでなく、死ねば往生疑いなしという信仰」であると云い、山岳宗教について、「大峰山（金峰山）へ入峰するといふことは、一旦死ぬことであり、山中遍歴は死後の死出の山の遍歴であつて、その苦痛によつてそれまでに犯せる罪穢をすっかり浄化、滅罪してしまふ。そうすると成仏（即身成仏と死後成仏）することもできるし、極楽浄土へ往生することもできる」と云い、この山中の死者の世界へ入つて生まれ代りをすることを「擬死再生」と言っている（注7）。さらに鈴木正崇氏は「変身にあたつて水の果たす役割は大きい」とし、「大峰山の峯入りでは、吉野川の六田の渡りで水垢離をとり、（中略）水の浄化力により俗世のケガレを祓い清めて変身することで、山という他界に入るのである」と言う（注8）。おかめの鴨川への身投げは、ケガレを祓い清めるといつた他界へ入るための準備とも言える。

だとすれば、神隠しと身投げによるおかめの死は、滅罪と往生のための擬死再生儀礼と読める。そして、おかめは芸者小三として生まれ代わるのである。それも廓という場に再生するのである。

遊女が聖なる存在であつたことは、佐伯順子氏の説くところである（注9）。その聖なる遊女たちを開つた聖なる空間である廓（注10）に、小三は再生したのである。佐伯氏は、「廓が廓として自閉的な性格を持つのは、遊女の逃亡を防ぐという現

実的な意味もあつたが、この世の極楽、他界として、存在の非日常性を確保するためでもあつた。遊廓がしばしば川の近くにあり、吉原に通うのに猪牙船が好まれたのも、水があつた世とこの世の橋渡しをしてくれるからである」とも言う(注11)。廓は聖なる空間であると同時に非日常の他界でもあつた。小三の廓への再生も、大峰山の山中遍歴のように、廓という他界(遊女たちにとっては地獄)での苦痛によつて、罪穢を浄化、滅罪し、極楽浄土へ往生するための擬死再生儀礼と読めるのである。それではなぜ小三は聖なる空間に再生したのか。小三は金五郎の前に再生し、また一人他界へと去つていく。一見無意味な再生のようにも見えるが、この再生は金五郎を変える。初めに小三が行方不明になつたと知らされた金五郎は「世にたのしきこともなく、おもしろからぬ日を過すうち」友達に誘われて廓へ通うのである。『夜の鶴』でも、「思ひ切てもすてられず、たゞ一時の間もわすれ兼、外の女は見むきもせず、はかなき月日を過しける」と小三のことが忘れられず廓に通うのである。それが二度目の小三自害後の金五郎は、小三に言われた通りお雪と仲睦まじく親へも心配をかけず、酒もやめると言い、「思へば小三はおれが為の、善知識でもあるだろう」と言うのである。小三の再生は金五郎の悩み、苦しみを取り去つたと言える。「原始宗教の捨身や、死にいたる実践というものは、滅罪であつた。自己の罪業をほろぼすとともに、共同体の罪を背負つて、我が生命をもつて罪を贖ふことであつた」と五来重氏が言う(注

12) ように、小三は自己の滅罪だけでなく金五郎の罪穢も浄化したと言える。

小三は一人往生するのではなく金五郎を救済して往生する。それは「曾根崎心中」のお初が、観音の示現として再生し(注13)、徳兵衛を往生へ導いたのと似ている(注14)。観音菩薩が衆生を救うために三十三のからだに変身することは、『法華経』『普門品』などに見え、庶民信仰として広く流布していたことは言うまでもない。『娘節用』では、おつるのおかめ姉妹は「神仏にいのりしゆゑ」に授かつたとしか書かれていないが、『夜の鶴』では、産後の肥立ちが悪く母親が亡くなつたのに対し「是もやつぱり観音様がむりな願ひをする人にみせしめて」と嘆くところから、観音に祈願して授かつた子であると読める。小三はもとよりおかめにも、生まれた時から観音のイメージが備わつていたと言えよう。

また、小三は「加茂河へながれ着たを、近所のものに引上られ」たと言うが、それはつまり漂流してきたということである。網野善彦氏が、『漂流物が『無縁』のものであり、それ故、仏神のものとして、多少とも『聖』なる意味をもっていた』(注15) ように、漂流してきた小三には聖なる意味が備わつていたと言える。さらに小三は京からやつて来るわけだが、桜井進氏が、「江戸期の地図は西を上にして、一見、朝廷を尊重するように見せかけているが、実際には、太陽の沈む西方浄土に京都を見立てることによつて、京都を死の国になぞらえた」

と言う（注16）ように、京が西方浄土と見做せるならば、ここから小三の聖性が感じられる。

小三に観音のイメージや聖性が備わり、聖なる空間である廓に再生したからといって、もちろん小三は遊女として再生したわけではない。芸者として再生したのである。しかし、芸者だからといって遊女に比べ聖性がないとは言えない。遊女が元来「芸能する女」であり、「芸能をもつて神々に語りかけ、神々と交わることのできる存在」（注17）だったのが、近世に入り、「そもくいにしへのよき女郎といふものは、琴は三曲も暗からず、三味線の手よくまはれども、（中略）今時はさやうの事いかな／＼思ひもよらず」（元禄十六年刊『好色敗毒散』巻三の二）と言われたように、聖なる芸能者としての力を失ってしまった。そんな近世の廓で芸能に携わっていたのが芸者であったことを考えてみれば、芸者もまた聖なる存在であったと見てよいであろう。もっとも、小三が金五郎の前に再生したのは、「浅間のをどりにこの小三を傾城奥州に仕立」た俄狂言においてであった。小三は遊女の姿で金五郎の前に再生したのである。

小三は二度目の自害の直前に、隅田川を渡り向島へ行っている。尼となった姉の庵を訪ねてである。隅田川を渡るということとは、鴨川を渡るのと同じく他界へ行くことを意味した。桜井進氏は、「明暦の大火（明暦三年、一六五七年）の死者の無縁仏が、隅田川東岸（川向こう）の回向院にまつられているというように、江戸の都市空間の周縁に位置する隅田川の水辺は、

庶民たちの盛り場であったが、江戸にとって腐臭を放つ、他界と接する空間でもあった。」と言ひ、「隅田川兩岸は、江戸期には他界への入り口であり、隅田川の向こう岸（東岸）が他界として意識されていた」と言う（注18）。また、前田愛氏は『東海道四谷怪談』（文政八年七月江戸中村座初演）を例に、「砂村隠亡堀に淀んでいる昏い水のイメージは、江戸空間を蝕んでいる病理的な部分のみことな象徴である。」とし、「戸板に打ちつけられたお岩と小平の死骸は、早稲田田圃のあたりで江戸川に投げこまれ、神田川から大川を経てこの隠亡堀に流れつく。屍臭をただよわせる水の流れは、『四谷怪談』では空白のまま放置されていた市街地の中心部を通底し、雑司ヶ谷とその反対側にある深川とを同じ死の局面で結び合わせるのである。」と言ひ、「伊右衛門のまなかにあらわれたのは、お岩の怨霊であると同時に、江戸空間のいたるところに偏在する死の風景であったといつてもいい。」と言う（注19）。『四谷怪談』に限らず、「隅田川統佛」（天明四年四月大坂角の芝居初演）で惨殺と亡霊出現の場として隅田川が利用されていることや、『三人吉三廓初買』（安政七年正月江戸市村座初演）で悪党の集う場として隅田川が利用されていることなども、この川に他界との境界としてのイメージがあったからであろう。そして宮田登氏は「江戸の場合、隅田川の橋場を渡って、鐘が淵を臨みつつ、向島にまでわざわざ行くことにより、江戸内部にある悪しきものを破うという形をとった」と言う（注20）。つまり、ここで小三は再び罪穢を

浄化、滅罪し、極楽浄土へ往生するための擬死再生儀礼を行うのである。それはなぜか。一回目の擬死再生によって、おかめの罪穢は浄化されなかったのか。そうではない。確かに浄化された。しかし、金五郎との再会によって新たな煩惱、この世への未練が出来てしまったのである。金五郎との間に出来た子、金之介がそれである。「女子は罪深き身に、罪かきなりていつの世に、罪滅さんやうはなし。うすき縁にしは前の世の、因果と思ひ定めなば、人をうらみ身をうらむ、よしなき罪はなきものをと、あじなき世を悟れども、心ばそさのいとしく、生さきのある子を捨て、いとしい男のためながら、くらき冥土へ旅立んは、よくく業の深き身」と小三は胸を苦しめていた。

隅田川といえは、思い浮かぶのは、謡曲「隅田川」であろう。もつともこの「隅田川」も、川を越えた先が他界として意識されていたからこそ、そこで亡くなったわが子の霊と対面できるわけである。「隅田川」の子を思うあまり狂女となった母親の姿を出すまでもなく、「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」(『後撰和歌集』藤原兼輔)と歌われたように、いつの時代でも、親にとってわが子は迷いの種である。それは小三にとつても同じであった。小三にとつての向島行きは、往生の妨げとなるわが子金之介を姉に託すためであった。つまり子という未練を捨てて自害するための準備であった。この向島行きがあったからこそ、小三はわが子を残してでも迷わず成仏出来たと読めるのである。

以上は「娘節用」を中心に見てきたが、「夜の鶴」でもほぼ同内容である。つまり「娘節用」は写本の段階ですでに、女主人公の救済者としての再生と往生の物語であったと言うことができる。

ただし、「夜の鶴」と言えば「焼野の雉子夜の鶴」から連想されるように、子を思う親の恩愛の物語であったと、その書名からは言える。それに対し「娘節用」は、女性の手本とすべき女主人公の物語である。もつとも、わが子のためとはいえず、子を残して死んでいった主人公には往生してもらいたいという思いが「夜の鶴」の作者や読者にもあったであろう、ということとは推測できる。

四

「娘節用」は、「夜の鶴」と共通する要素を見ただけでも、十分往生の物語と読めたわけだが、さらに、「夜の鶴」には見られない「娘節用」特有の要素を見ておこう。

「娘節用」は、その角書きにもあるように「小三金五郎」の物語である。山口剛氏がすでに言われているように、小三金五郎の恋物語は小唄、祭文、浄瑠璃などいろいろな形で謡われ人口に膾炙していた(注21)。「娘節用」の主人公は芸能で取り上げられるような人物であった。芸能の目的の一つが、この世に未練を残し往生できずにいる魂の鎮魂にあったことは折口信夫氏などの言うところである(注22)。つまり、「娘節用」は小三

金五郎の物語であるという時点で、往生できずに彷徨う魂の鎮魂に目的があったと言える。もちろん『娘節用』は人情本である。近世後期の戯作だ。近世期の戯作が歌舞伎や浄瑠璃、歌謡などの芸能から多大な影響を受けていることは周知の通りである。また、先行作を利用し作り上げていくその作り方においても、歌舞伎や浄瑠璃と戯作には共通するものがある（注23）。だとすれば、戯作である人情本にも芸能と同じ目的を読み取ることも出来よう。

また、小三という女性には救済者としての聖性が備わっていた。『祺陽奇観』（天保四年成立）の「額の二三の伝」が伝えるところでは、小三は「額風呂の垢すり女の通り名にして代々あれども金屋金五郎の唱歌に其名高き小さんは元禄中成」と風呂屋の垢すり女であった。かつて風呂が穢れを落とす清めの場であったことは、黒田日出男氏などの言われるところである（注24）。金五郎の悩み、苦しみを取り去る救済者としての能力を、小三という女性はおそらく備えていたわけである。

もっとも、『娘節用』が小三金五郎の物語であるのは、山口剛氏の指摘にもあるように、直接的には文化八年正月江戸中村座で上演された『東都名物錦絵始』や、文政二年六月江戸河原崎座で上演された『裏模様菊伊達染』によるのであろう（注25）。しかし、きっかけが間近に上演された歌舞伎にあったにせよ、『娘節用』が小三金五郎の物語であるという時点で、そこに鎮魂の目的を読むことができることに変わりはない。

また『娘節用』では、向島を訪れた小三は、「坊をつれて梅屋しきの七くさから、蓮華寺の大師さまへお参り申ませう。今年は旦那も前厄でございますから、お身のうへに何事もないうに、金ぼうの行すゑやわたくしの、後の世の助かるやうに、よく祈つて参りませう」と蓮華寺に参詣している。『武江年表』によれば天保四年二月に蓮華寺で富士山本尊大日如来の開帳が行われ、当時の人々にとつてそれは話題の出来事であり、直接的にはその影響を受けて書かれているのかもしれないが、この蓮華寺には、『江戸文学地名辞典』（浜田義一郎監修・東京堂出版）でも言われているが、「女人済度御自筆弘法大師」という文化十五年の石碑が現在でも門前に建っている。文化文政期、蓮華寺は「寺島の大師」といわれ栄えた女人済度の寺であった。つまり、小三の蓮華寺行きは往生のための参詣であったと言える。『娘節用』では、隅田川を渡り向島へ行くことによる滅罪に加え、極楽往生を確かなものとするかのように主人公に蓮華寺参詣をさせている。もっとも『夜の鶴』でも難吉は向島へ行く前に、回向院における善光寺の開帳へ参詣している。一応写本の段階から往生のための参詣は書かれていたということになる。

蓮華寺に参詣し、わが子金之介を姉に預けた小三は、その夜のうちに自害する。自害の前に『夜の鶴』でも『娘節用』でも女主人公は鐘の音を聞いている。だが聞く鐘は違う。『夜の鶴』では「八つの鐘の音に驚きおき上り、いつの間にあつらひけん

白縮緬の袷を着かへ」と八つの鐘の音を聞いて自害するが、『娘節用』では、「ふり帰りは目に涙、哭音をしのお親鳥の、雛に別る、思ひにて、氣も絶々になる鐘の、無常の風にひゞき来て、耳をつらぬく入相に、おどろかされて氣を取なほし、心弱くてはかなはじと」と入相の鐘を聞いて姉の元を去る。『娘節用』では、生前の小三が描かれるのはここまでで、「小三は白無垢を身にまとひ、いつの間にやら自害なしけん」と自害の場面は描かれず、翌朝の発見の場面へと続いていく。つまり小三がこの世で最後に聞く鐘の音は入相の鐘ということになる。

一般的に鐘の音には煩惱を取り除く力があるというが、特に入相の鐘というのは、夜の世界、人間以外の神や妖怪などの支配する世界（異界）となることを知らせる意味を持っていた（注26）のに加え、謡曲『三井寺』に「初夜の鐘を撞く時は、諸行無常と響くなり、後夜の鐘を撞く時は、是生滅法と響くなり、晨朝の響は、生滅滅已、入相は、寂滅為楽と響きて」とあるように、寂滅為楽と響いたのである。

この「諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅為楽」というのは『涅槃經』の四句の偈であるが、『往生要集』などによれば、『大經偈云、諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅為楽、（已上）祇園寺無常堂四角有頗梨鐘、鐘音中亦說此偈、病僧聞音、苦惱即除、得清凉樂、如入三禪、垂生淨土」（大文第一の七）とこの鐘の響きを聞いて病僧は安らかな氣持ちになり、成仏できたという。『曾根崎心中』のお初徳兵衛が「あれ数ふれば曉の、

七つの時が六つ鳴りて残る一つが今生の、鐘のひゞきの聞きをさめ。寂滅為楽とひゞくなり」と、入相の鐘ではないが、やはり鐘の音の響きを「寂滅為楽」と聞いて安心して死んでいったように、小三も入相の鐘の音を聞いて安らかに自害したと言える。

以上、『夜の鶴』には見られない『娘節用』特有の、往生の物語として読める要素を取り上げてみた。『娘節用』は『夜の鶴』以上に主人公の往生の物語として読めると言えよう。

五

『假名文章娘節用』は、写本で流布していた『人情夜の鶴』、あるいはそれに近い別の写本をもとに、曲山人が補綴して刊行したものであろうが、写本の形で流布していた時から、主人公の往生の物語として読めた。補綴者曲山人がもとにした写本をそのように読んだかどうかはわからない。もしかしたら曲山人が往生の物語としての色をより濃く出すために、蓮華寺参詣を加え、入相の鐘の音を最後に聞かせたのかも知れない。だが今は曲山人の独創性については考えない。結果として『娘節用』は、小三金五郎を主人公としたことで彼らの浮かばれない魂を鎮め供養する物語となり、写本『夜の鶴』以上に主人公の往生の物語として読めるようになったことは確かである。

その後の曲山人の作品、『娘消息』（天保五年刊）や『娘太平記操早引』（天保八年刊）は、いずれも途中までで絶筆となつて

おり、後を他の作者が書き継いでいるので、曲山人がどのような物語を目指していたかははっきりしないが、『娘消息』が初徳兵衛、『娘太平記操早引』がお千代繁兵衛（享保七年四月大坂豊竹座初演紀海音作『心中二ツ腹帯』・享保七年四月大坂竹本座初演近松門左衛門作『心中宵庚申』）といった浄瑠璃に取り上げられるような、鎮魂してやらねばならない人物たちを主人公に設定していることは、『娘節用』以後の曲山人の目指したものが往生の物語であつたとも考えられよう。

もちろん、曲山人がもとにした粉本が『夜の鶴』であつたとは限らない。前編序文に「爰に著す一部の冊子は、如何なる人の筆に稿りけむ、小三金五郎が一期の奇譚を、いと長々しく綴りたるを、書肆のもて来て、補ひてよと、需めにしたがひ、をこがましくも、いさゝかこれに筆を加へて、桜木に寿くこととはなりぬ」とあるのをそのまま信じれば、小三金五郎を主人公とした写本が存在し、それをもとにしたのかもしれない。仮に小三金五郎を主人公とし、蓮華寺参詣を盛り込んだ写本が存在したとしても、刊本『娘節用』が往生の物語として読めることには変わりない。

また、近世期の戯作に芸能に通じるものがある以上、『娘節用』に限らず、死を扱った物語は多かれ少なかれみな、往生の物語として読めるのかもしれない。非業の死を遂げた者は成仏させてやらなくてはいけない。そうでなければ、作者も読者も安心できない。そういう無意識が背景となり、写本『夜の鶴』も

『娘節用』も往生の物語になったと言ふべきなのかもしれない。つまり『娘節用』が往生の物語として読めるのは、ユングの言う「集合的無意識」（注27）によるということになる。

もちろん、『娘節用』は人情本であるから、三角関係にわたる情痴的恋愛の種々相も描かれている（注28）、形式を重んずる武家社会の義理にからまれて、愛人と愛児を残しての妓女の自殺という悲劇（注29）という読みも確かにその通りであろう。そういったこれまでの読みを否定しようという気はない。それらの読みと合わせて、『娘節用』には往生の物語としての読みも可能であると言いたい。

注

- 山口剛氏は、日本名著全集「人情本集」解説で、「補綴の筆は相応に多かつたらう。稿本は筋書風のものに過ぎなかつたらう」と言われ、武藤元昭氏は「素人作者曲山人」（『芸能と文学』所収）において、勸懲思想がほとんど見られないことや、従来の作にない豊かな市井の情緒が漂うことを根拠に、「一人の戯作者の内的変質というには前作からの変化が極端すぎる」として、「写本で行われていた種本をもとに書かれたと考えてよい。それも、相当量、種本の影響を受けていると考えられる」と言われた。

- 「人情本の型」（『近世文芸』七十号）において、「この写本、管見一本の上、落丁等もあるので、底本であることは他本

の出現をもって確定したい」としながらも、「筆の運びや人物名の差異、刊本特有の広告的文言がない事等から」底本かと推定できるとされる。

3 前田愛「江戸紫―人情本における素人作者の役割」(『国語と国文学』一九五八年六月)

4 笹本正治「神隠しと鉦や太鼓」(『怪異の民俗学』八「境界」所収) また、『日本民俗大辞典』(吉川弘文館) 池上良正氏の「神隠し」解説によれば、隠された後に一回だけ姿を見せるといった一定の類型も認められるとある。

5 浅沼圭司「結び隔てるもの」(『日本の美学』二十八号特集「橋」一九九八年所収)

6 「中世の身分制と国家」(『岩波講座日本歴史』八所収) において、「平安京城から閉めだされた死穢は、京城の外側にあつてその東西を迂回する鴨川と桂川の河原に集中せしめられるようになっていた」と言い、『続日本後紀』に鴨の河原が鵜飼の集積地として登場していることなどを紹介している。

7 『日本人の地獄と極楽』

8 「祭りと水」(『水の原風景―自然と心をつなぐもの』所収)

9 「遊女の文化史」(中公新書)

10 諏訪春雄氏は、「廊細見―廊の遊びと生活のすべて」(『国文学』一九九三年八月号「廊―江戸の聖空間―」において、廊は「そこが性をあがなう聖なる空間」であつたとし、「廊

全体が神聖な空間として、そこでいとなまれる性のいとなみを厳粛にはなやかに演出した」と言う。

11 「遊女の誕生」(『国文学』一九九三年八月号「廊―江戸の聖空間―」)

12 注7に同じ。

13 今尾哲也氏は「注釈の原点―『曾根崎心中』の場合」(『文学』一九七〇年四月)において、「観音の映像にお初の映像をダブらせ、観音の示現にお初の示現をかさね」ているとして、「この発想を媒介しえたのは、女身観音の信仰であつたろうが、さらには性空上人以来の、遊女を生身の仏と観ずる伝説の流布が、あずかって力あつたに相違ない」と言う。

14 白方勝氏は『近松浄瑠璃の研究』で、「観音が娑婆に示現したのがお初ということになる。このお初が徳兵衛を導き、成仏に至るという中世以来の本地譚の発想をこの作品は持っていたのである」と言う。

15 「無縁・公界・楽」(平凡社ライブラリー)

16 「江戸のノイズ」(『監獄都市の光と闇』(NHKブックス)

17 注11に同じ。

18 注16に同じ。

19 「都市空間のなかの文学」(ちくま学芸文庫)

20 「境にひびく音」(『怪異の民俗学』八「境界」所収)

21 日本名著全集「人情本集」解説

『日本芸能史六講』第二講・第三講（『折口信夫全集』二十卷所収）で、芸能の目的は鎮め・鎮魂であったと言い、

「日本の芸能でこの傾向を持つてゐないものはない」と言う。

折口信夫氏は、「日本芸能の特殊性」（『折口信夫全集』二十一卷所収）において、独創性のなさということから、近世

期の戯作を文学において芸能に当るものであると言う。

「中世民衆の皮膚感覚と恐怖」（『境界の中世象徴の中世』所収）において、十一世紀前後からそれ以前の裸・川浴みな

などによる身体の清浄を保つスタイルから、湯浴を中心にして

身体の清浄を保つ方向へ変化していくと言われ、十二世紀後半以降、追善・逆修などを目的とする施浴が一般化し

たと言われる。

注21に同じ。

笹本正治氏は、「中世の音・近世の音——鐘の音の結ぶ世界——

において、梵鐘は他界から来たもので、この世とあの世を

繋ぐことのできるものであるとし、この世で打ち鳴らされ

る鐘の音が、この世における煩悩で身を焼いている人間を

救い、またあの世にまで聞こえ、あの世で苦痛にあえぐ魂

も救済すると言われ、入相の鐘は、これから夜の世界、人

間以外の神や怪物の支配する世界になるということを、双

方の世界の住人に知らせるものであると言われる。

「分析心理学と文芸作品の關係」（『創造する無意識』平凡社

ライブラリー）において、「集合的無意識」とは、「無意識

の神話という、人類の共有財産である元型的イメージを含

む領域」で、「それがあるからこそ、どんな大胆な空想にも

一定の限界が画される」と言う。

『日本古典文学大辞典』（岩波書店）「人情本」神保五弥氏解

説

『日本古典文学大辞典』（岩波書店）「仮名文章娘節用」水野

稔氏解説

付記 写本「人情夜の鶴」を参照するにあたり、鈴木圭

一氏にいろいろと教示いただいた。この場をかりて

感謝申し上げる。

（ひやま・じゅんいち／日本女子大学附属高等学校教諭）